房総地域の山岳宗教に関する基礎的考察

An Inquiry into Religion of Mountains in the Bôsô Area

井 上 孝 夫

Takao INOUE

〔目　次〕

第1節　はじめに ── 課題と方法 ──
第2節　鹿 野 山 ── 軍茶利明王信仰の実像 ──
第3節　鋸　　山 ── 行基伝説の謎 ──
第4節　富　　山 ── 忌部氏の実体 ──
第5節　愛 宕 山 ── 雨乞いと火の神 ──
第6節　高 塚 山 ── 雷神・風神と高橋氏 ──
第7節　清 澄 山 ── 妙見と虚空蔵 ──
第8節　結　　語
＜注＞
＜文献＞

第1節　はじめに ── 課題と方法 ──

房総半島には本格的な登山の対象となるような山岳地帯は存在しない。この地域の最高峰は嶺岡山系の愛宕山（408.2m）であり，清澄山（383m），鹿野山（380m），御殿山（364m），富山（350m），鋸山（329m）というように標高300m台の山々が並んでいる。全体としてみれば丘陵地帯であって，中部山岳はいうには及ばず，丹沢や奥多摩の山々とも比肩の仕様のないところである。

だがその一方で，この地域は市川市在住の画家・東山魁夷が描いているように，深山幽谷の趣きを残している。そして実際のところ，かつては修験道という名のもとに一括される山岳宗教の聖地でもあったわけである。標高がせいぜい300m台の山々であるにもかかわらず，修験者の網の目がくまなく張りめぐらされていたのはどのような理由によるのだろうか。本稿はこの問いに答えるべく，房総地域における修験道の原初形態としての山岳宗教の存立基盤について，基礎的な考察を試みることにしたい。

本論に入る前に，ここで採用する方法論についてあらかじめ述べておくことにしよう。

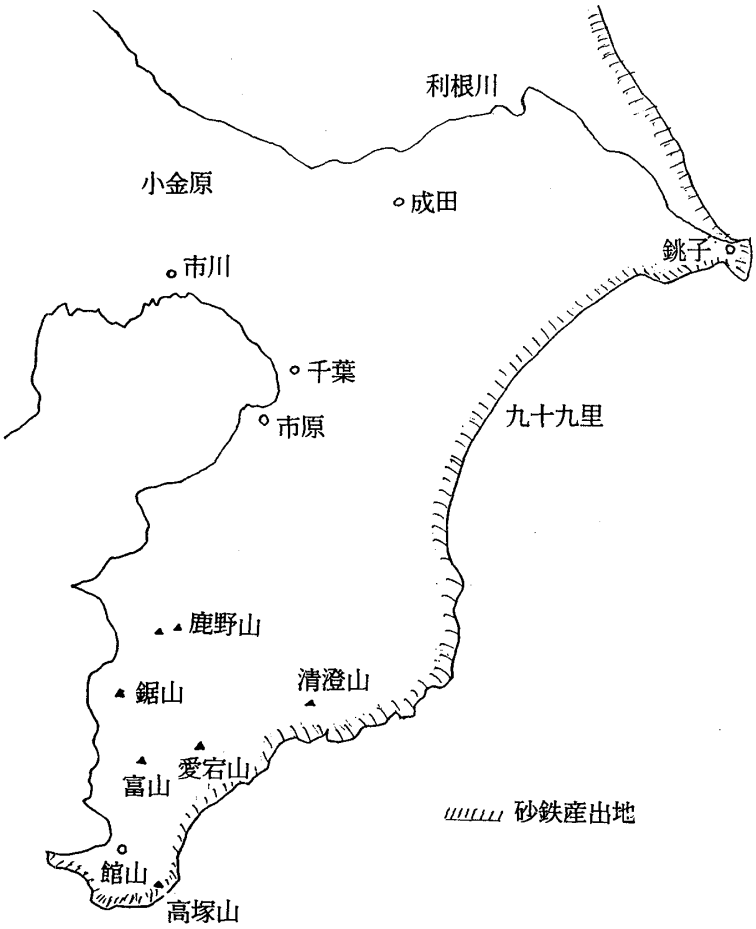
山岳宗教に関する文献的な資史料は極めて限定されている。それは修験道の秘儀的な性格によるところが大きく，また明治初年における修験道弾圧の影響も大きい。その原初形態についても不明な点が多く，わかっていることもいわば伝説化した内容である。

そこで本稿ではまず，対象地域を限定する。和歌森太郎の『山伏』（中公新書・1964年）の巻末に付された「修験が関与した可能性のある山」の一覧のうち，房総関係では次の6座が関係寺院とともに掲載されている。

①鹿野山 ── 神野寺（密教，仏教）
②鋸　山 ── 日本寺（密教，仏教）
③富　山 ── 観音堂（密教，仏教）
④愛宕山 ── 愛宕祠（民間信仰）
⑤高塚山 ── 不動堂（修験）
⑥清澄山 ── 清澄寺（密教，仏教）

もちろん修験道が関与したと思われる山はほかにも多数あるが，ここに掲載された6座は房総の代表的山岳を網羅しており，一応過不足はない。このような判断から，本稿においても対象としてこの6座を頂点とするそれぞれの地域を選んで，検討を加えていくことにしたい。

次に，本稿では各地域の山岳宗教を解明するための素材として，遺跡，伝説，地名，寺社縁起などを取り上げて，これらを有機的に関連づけていくという方法を採る。これらの素材のもつ意味はおよそ次のようなところにある[1]。



〔図1〕　房総の主要山岳概念図

〔1〕遺　跡

土地に刻み込まれた人間活動の確固たる「物証」である。本稿では各種の『調査報告書』に基づいて，遺跡から発せられている貴重な情報を活用していく。

〔2〕伝　説

伝説は地域の民衆によって語り伝えられてきた一つの物語りである。その意味で民衆意識を反映するものとみることができる。しかし話の内容は説話的，教訓的なものも多く，しかも支配者の側から語られる場合が多い。また残酷な内容を含むものも見受けられる。民衆意識というものは多分に権力に同化された者の意識という性格をもっている。しかしその内容にはやはり，歴史的リアリティが含まれているとみるべきである。それゆえ伝説を手がかりとする場合には，話の内容を鵜呑みにすることなく，ある種の裏読みをしていかなければならない。伝説を手がかりに歴史的リアリティを探り出す作業は，権力によって貶められ抹殺されていった人々の闇の世界を照らし出すことにほかならない。

〔3〕地　名

地名もまた地域の文化や歴史を把握する際に有力な手がかりを与えてくれる。例えば山口県美東町の「長登（ながのぼり）」地名が「奈良登（ならのぼり）」の転訛であるとのいい伝えが東大寺大仏の原料（料銅）供給地を解明するための手がかりを与えたように，地名は歴史的事実を映し出すことがある。また全国各地に点在する同一の地名が同一の歴史的リアリティを反映していることも多く，すでに解明されている地名由来によって特定地域の歴史的事実が浮き彫りにされる場合もある。いずれにせよ，地名は一

つの「文化遺産」としての位置を占めているのである。

〔4〕寺社縁起

寺社縁起は寺社の創建事情について，伝承されてきた事柄を書き記した文献史料であり，伝説と同様の性格をもっている。従って伝説を扱う場合と同様に，慎重な裏読みが必要である。また江戸時代初期に幕府の寺社奉行に提出された際に書かれたものもあり，創建年代が実際よりも古く書き記されていることも多いので，この点でも注意が必要となる。

およそ以上のような対象および方法に基づいて，本稿では房総地域の代表的な山岳について順次検討を加えていくことにしたい。

第2節　鹿野山 —— 軍荼利明王信仰の実像 ——

まずはじめに君津市と富津市の境界に位置する鹿野山を取り上げてみよう。鹿野山は全国最初の一等三角点がおかれた山として知られ，関東三名山の一つでもある。山頂を構成する三つの峰は東から白鳥峰（380m），熊野峰（380m），春日峰（353m）と呼ばれ，それぞれ白鳥神社，神野寺，春日神社が鎮座し，宗教的色彩が濃厚である。

この鹿野山は幾多の伝説に彩られている。

まず日本武尊の伝説がある。日本武尊は東征に際して，鹿野山麓の吾妻神社（富津市西大和田）から白鳥になって鹿野山に飛んだとか，吾妻神社から白鳥が道案内したとかいわれ，白鳥の止まったところが白鳥神社だといわれている。

またそれに付け加わるかのように，悪路王の伝説もある。日本武尊に征伐された鹿野山の先住民の王が悪路王だとされるのだが，延暦2年（802年）に坂上田村麻呂に征伐された蝦夷の首領・阿弖流為（あてるい）が悪路王であり，そうだとすると日本武尊とのかかわりは年代的には全くないことになってしまう。

さらに，神野寺にまつわる聖徳太子や阿佐太子の伝説もある。それによると日本武尊ゆかりの地である鹿野山に聖徳太子が訪れ，推古6年（598年）8月に神野寺を創建したという。また百済聖明王の第二子である阿佐太子も神野寺に7年間滞在し，推古8年（600年）にこの地で没したとされ，山中には阿佐太子塚も残されている。

その一方，鹿野山の西方に位置する鬼泪（きなだ）山には鬼伝説がある。鬼泪山には日本武尊に追われた賊が逃げて泪を流した場所であり，この山に源を発する染川は鬼の血が流れたところから，血染川とか血草川ともいわれている。

これらの伝説は通常，大和政権の東征にかかわる先住民支配の歴史的過程を物語るものと解釈されている。つまり征服者側は先住民を鬼や悪路王と名づけて悪者扱いし，自分たちの支配の正当性を伝説化したというものである。確かに房総半島は大和政権が東方へと支配を拡大していくうえで重要な足がかりとなり，ここを拠点にしてさらに利根川北へと支配がすすんでいったのであった。従って鹿野山周辺に残る伝説の多くはそのような歴史的過程を物語るものと考えて，おおむね妥当なところといえるだろう。

だが現在の研究はここからさらにすすんでいる。例えば柴田弘武氏は鬼伝説にかかわって，このような伝説を鉄（鉱物）資源をめぐる争奪戦という観点から捉え，鹿野山は「金生山」であったという説を提起している[2]。この柴田説は鹿野山の来歴を考えるうえで，その本質を衝くものと思われるので以下にその論点を要約しておこう。

柴田氏によれば鹿野山周辺には多くの鉄資源があり，それを支配していた悪路王を後続の大和政

権が打ち破って，新たに資源を領有したというのである。すなわち柴田氏は「鹿野山のアクロ王もまた東国土着の産鉄豪族であって，鉄を求めてやってきたヤマトタケルに代表される侵略者に敗れたのである。その悲しい歴史がアクロ王伝説となって語り伝えられたのだろう」とし，併せて鹿野山の名称由来も「金属を生み出す山」としての「金生山」にあったとしている。柴田氏がここで「土着の産鉄豪族」と呼ぶのは鹿野山を頂点とする水系の下流に拠点をもっていた西方からの移住者「オオ氏」を指している。つまり紀元5－6世紀に成立した須恵国（富津市周辺），馬来田国（木更津市，袖ケ浦市周辺）はその支配者の「系統」や「地名」からみても産鉄豪族の国であり，そのことはこの一帯に数多く残されている製鉄遺跡からも裏づけられるというのである。

このように柴田氏は製鉄（産鉄）関係の資史料に基づいて，大和政権が悪路王に代表される先住民を支配していった過程をより具体的に解き明かしている。この点は高く評価するべきだろう。

しかしいくつかの疑問も残る。例えば神野寺と製鉄とのかかわりが不明確だという点を挙げることができる。このことは宗教と製鉄とのかかわり合いへの視点の欠落を意味するだろう。柴田氏は富津市の岩富寺，宝亀寺，白山神社，吾妻神社なども取り上げているが，もっと宗教と製鉄とのつながりを前面に出して，これらの寺社と「金生山」としての鹿野山とのかかわりが考えられてもよいのではないだろうか。また鬼泪山の鬼伝説の解釈に関しても，それを単に「大和政権対先住民」の図式とみなしてよいのかという疑問も残る。全国各地にみられる鬼伝説を広め，それを語り伝えた主体は一体だれなのだろうか。

このような問題点に着目したうえで，ここでは鹿野山の由来を神野寺とのかかわりから捉えていくことにしよう。

神野寺はもともと白鳥神社の山ふところの「ゼンダナ」の地にあったが，天慶期（938－947年）に全焼してしまい，その際，釈迦，薬師，観音，軍茶利の4体から成る本尊のうち釈迦，観音の仏像が焼失し，薬師，軍茶利のみが残されたという。これらの本尊のうち，特にきわだっているのは軍茶利明王像である。この軍茶利明王像は一説では悪路王とも考えられているが，鹿野山固有の信仰ではない。軍茶利明王とは密教の教えるところでは，「外敵を除去し，人間を守る」明王である。従ってそれは悪路王に代表される鬼ではなく，むしろ鬼から人間を守る守護者としての意味合いをもっているわけである。また他面では軍茶利明王は日本武尊の伝説ともかかわっている。東京都の秋川の源流の一つに軍刀利沢があるが，ここも明王に絡んでいる。この沢から南へ稜線を越え，山梨県側に出た上野原町井戸には軍茶利夜叉明王を祀る軍刀利神社が鎮座している。この神社は東京都と山梨県との境界をなす稜線上，三国山と熊倉山との中間に鎮座していたのだが，火災にあって現在地に移された経緯がある。この付近一帯は日本武尊の東征の経路だったとの伝承があり，山中には日本武尊ゆかりの甘草水なる水場もある。この地に軍茶利夜叉明王が祀られているのはこの日本武尊伝説とのかかわりが濃厚であり，鹿野山の場合と同一の成立由来をもっているものと思われる。

さらに蛇をからませた明王の姿は蛇神としての性格を示している。蛇は「ナーガ」の思想を体現するものであり，密教における製鉄信仰と深くかかわっているのである[(3)]。

このような事情を踏まえると，神野寺は密教系製鉄集団による創建ではないかと考えることができる。聖徳太子開山伝承も彼らが持ち出したものではないだろうか。聖徳太子は秦氏とのかかわりが深いことから，聖徳太子開山伝承を持ち歩いたのは秦氏由来の製鉄集団だったとも考えられる。

また阿佐太子が登場するのも，阿佐太子が聖徳太子の肖像画の作者といわれているからかもしれない。聖徳太子，阿佐太子が登場する背景には，太子信仰を持ち歩く秦氏系の製鉄集団の存在があったのではないか。なお阿佐太子は百済聖明王の第二子であるが，その弟（つまり聖明王の第三子）は淋聖太子である。神野寺は「淋聖院神野寺」と称しており，淋聖太子とのかかわりもあるのかもしれない。この淋聖太子は朝鮮半島から周防国の多々良浜に上陸したとされ，妙見信仰をもたらし

た。その後，中世の豪族大内氏はこの淋聖太子を氏祖とし，多々良姓を名乗っている。多々良といい妙見といい，いずれも製鉄や鉱山とかかわるものであり，ここでも製鉄集団の存在が示唆されているといえるだろう。

神野寺は鹿野山周辺の豊富な鉱物資源に目をつけた密教系製鉄集団が創建した，とまず捉えてみよう。彼らは自分たちと深くかかわりのあった聖徳太子を開山の祖とし，太子ゆかりの人物の一人である阿佐太子を登場させてそれを補強した。日本武尊の伝説も白鳥信仰，つまり鉱脈を探査しながら各地を渡り歩く自分たちの姿を白鳥に見立てるところに由来する。白鳥は「飛び去る」鳥であり，一所にとどまらないというところが重要な点である。また鬼（あるいは悪路王）の伝説も，製鉄という一種の呪法を使う自分たちの姿を映し出すものにほかならないだろう。鬼の血が染った血染川は鉄分を含んだ赤茶けた川の水の色を鬼が流した血にたとえたのである。鬼伝説は民衆のあいだから自然発生的に湧き出たものではなく，彼ら山岳宗教者が広めたものといえるだろう[4]。

その意味で鹿野山は金生山あるいは金鋳山であり，神野寺もともとは「カノウ寺」であり，金生寺ないし金鋳寺であった。鹿野山周辺の古代豪族が産鉄集団として鹿野山を信仰していたとしても，現在に伝わる寺院，地名，伝説，遺跡の多くは密教系修験者によるものだろう。神野寺の本尊，軍荼利明王の蛇をまとったその姿は彼らの製鉄信仰を象徴しているのである。

第3節　鋸　山 —— 行基伝説の謎 ——

鹿野山は密教系修験道とかかわりが深いことがわかったが，この鹿野山の南西に位置し上総（富津市）と安房（鋸南町）の境界をなす鋸山はその名のとおり鋸歯状を呈した岩山であり，いかにも修験者が好みそうな山である。福田良氏も「鋸山も修験の行場や験くらべの山として，各地からの修験者で賑った時代があった」[5]と指摘している。だが修験者が岩山を好むのは技を磨くこと以上に，鉱脈探査がしやすいという本源的な要求に基づいている。いずれにせよ，今日の鋸山の鋸歯状の凝灰岩が江戸時代以来の石切場として人為的につくられた部分があったとしても，元来修験者とかかわっていたことは間違いないところである。

この鋸山と深くかかわるのが山腹の日本寺である。この日本寺は聖武天皇の詔勅と光明皇后の令旨とに基づいて，神亀2年（725年）6月8日に行基（668－749年）が開創し，七堂，百坊，十二院を建立したとされる[6]。元禄10年（1697年）の然室竜鶴和尚の縁起によると，「行基即ち諸方を遍歴し，尋ねて房総の境に至り，当山の姿を仰げば，山巓分列して三尊来迎の相を現はし，嶺には常住の清風あって五種輪廻の雲を払ひ，中空より懸れる碧水潺々漲りて凡塵を洗ふ。即ち中央なるを薬師の異名，瑠璃光如来に因みて瑠璃山とし，左右なるを日輪山，月輪山と定め，此所に留って一刀三礼手自ら薬師如来を彫刻し，中腹の岩窟に安置し奉り，礼拝日に怠らず。傍ら伽藍殿堂の竣工を急ぐ。神亀二年六月八日堂宇尽く成り，名を乾坤山日本寺と号す。蓋し薬師如来は東方の教主なれば，日の本に象りて日本寺と名づけしなり」とあり，その事情を伝えている。行基開創後，日本寺には良弁，弘法大師，慈覚大師なども来山したという。だが南北朝期に火災に遭い，のち足利尊氏が来山して七堂十二院を修工した。その後，明治維新の排仏毀釈により荒廃し，さらに1939年11月26日の失火で焼失，第二次大戦中は全山要塞となった。戦後の1962年に復興事業が着手され，現在に至っている。

行基開山伝承や弘法大師，慈覚大師の来山伝承はいずれも山岳宗教につきまとう類型化された伝承であり，修験道とのかかわりを思わせる。また薬師信仰も広くみられるものではあるが，修験における製鉄とのかかわりが深い。修験とのかかわりではさらにもう一点，観音堂の存在が注目される。日本寺は安永年間（1772－81年）に愚伝和尚による現在地への移転が行なわれる以前は平那山

麓（元名村字寺畑）にあった。ただし観音堂は鋸山山麓の岩殿山（岩戸山，地元ではイワブサン）におかれ，行基作と伝えられる十一面観音像を本尊としていた。延宝2年（1674年）の徳川光圀の甲寅紀行によると，「元名村に岩戸観音あり，その山上に大福山日本寺とて薬師あり，十五石の御朱印あり」とあって，当時の状況を伝えている。この観音堂は光圀の訪ねる2年前の寛文12年（1672年）の建立というが，おそらく再建されたものだろう。そしてこの本尊である十一面観音像という変化観音も修験道ゆかりのものなのである。

このように日本寺と修験との関係は深いものがあるが，両者の関係ではっきりとわかっていることはこの寺が中世期に修験寺として栄えたことであり，天正年間（1573－92年）には富浦の正善院配下の修験寺となり，里見氏の保護のもとに寺領をもつに至ったのであった。おそらく日本寺と修験とのかかわりはその創建以来のものといえるだろう。

ただし行基開山説はそのまま受け入れるわけにはいかない。行基が五畿内に40余りの寺院を建立したことは知られているが，行基本人が房総までやって来たとは思えない。だが行基開山伝承は千葉寺（千葉市）や那古寺（館山市）など房総各地の寺院にみられるばかりでなく，高尾山薬王院をはじめとして関東一円の寺院にも広がっている。これは古代の一時期に，行基ゆかりの複数の修験集団が関東各地に寺院を建立していったなごりといえるだろう。彼らは薬師信仰や観音信仰を布教するとともに，山岳地域に分け入って鉱物資源を探査し，その物質的な力をもって戦乱にも加わった。多くの武将の崇敬を集めたのもそのためであるといえるだろう。

第4節　富　山 —— 忌部氏の実体 ——

この鋸山からさらに南南東7kmほどのところに位置するのが富山（富山町）である。この山は房総の山としては珍らしく双耳峰であり，北峰を金毘羅峰（350m），南峰を観音峰（342m）と呼んでいる。この金毘羅，観音の名称も修験道とのかかわりを思わせるものがあり，富山もまた修験の行場とみることができる。その一方，富山は滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』にも登場し，山中には伏姫と愛犬八房が隠れ籠ったという「伏姫籠穴」なるものも存在する。

しかし富山の名称は房総開拓の祖・天富命（あめのとみのみこと）に由来し，もともとは天富山と呼ばれ，それがのちに富山になったと語り伝えられている。ここでは，この天富命を手がかりにして富山信仰を考えていくことにしよう。

天富命は房総半島の南端，館山市布良（めら）の地に上陸したとされる。そしてここには安房神社（安房国一の宮）が鎮座し，天富命の祖父にして忌部（いんべ）氏の祖神である天太玉命が祀られている。「安房」は四国の「阿波」につうじ，忌部一族は阿波から黒潮に乗って布良の地に上陸したという。そして周辺には忌部氏ゆかりの神社がいくつか存在する。館山市の洲崎（すのさき）神社は天太玉命の后である天比理乃呼命（あめのひりとめ）を祀っているし，白浜町滝口および千倉町牧田に鎮座する下立松原神社は阿波忌部氏の祖である天日鷲命を祀っている。さらに丸山町沓見や同町宮下の莫越山（なごしやま）神社は讃岐忌部氏の祖である手置帆負命（たおきほおひ）を祀っている。このように忌部氏は四国から房総半島の最南端に上陸し，ここから房総各地を開拓していった。その痕跡は主として外房海岸沿いに残されているのだが，内房に属する富山は忌部一族の象徴としてあがめられていたのだろうか。

大同2年（807年）に忌部宿禰広成がまとめた『古語拾遺』によれば，忌部氏はこの房総の地で麻を栽培し，麻の古語である「総」が総の国（のち上総，下総）の由来になったともいわれる。讃岐の忌部氏も大麻山（616m）山麓の大麻神社を祀り，そこに銅鐸を埋納しており，忌部氏と麻とはただならぬつながりをもっている。

だが忌部氏は単に麻を栽培する民族だったのだろうか。銅鐸の祭祀者という点にも暗示されてい

るように，忌部氏は単なる農耕民ではなかった。忌部氏の祖神には天目一箇神がいて，製鉄氏族であることを示している。すなわち天目一箇神とは『古事記』では鍛冶屋であり，『日本書紀』では作金者（かなだくみ）であり，さらに『古語拾遺』では「雑（ここぐさ）の刀，斧及（また）鉄の鐸を作る」とされる製鉄神なのである。また東国各地への修験道勢力の進出に際して「大同二年」伝承が広範にわたってみられるのも，「大同二年」が『古語拾遺』の成立年代であることから，忌部氏の勢力圏を示すものとみる説が有力となっている[7]。

以上のことから，忌部氏とは修験道の一派を形成した製鉄集団とみることができるのである。従って房総の地名由来が「麻の栽培できる豊かな土地」とされる背後には，砂鉄としての「アサ」を吹く忌部氏の実像が隠されているとみることができる。そして富山という名称の由来も天富命にまつわるということ以上に，「富を包蔵する山」ないし「富の埋蔵を祈願する山」というところに求められるのではないだろうか。

この富山にはまた，ダイダッポの伝説として次のような話が語り伝えられている。

「ダイダッポが富山を枕にして休むと足が岩井海岸まで伸びた。村人は大勢でその足を海水で洗った。枕になった富山はそのために中間がくぼんで北峰と南峰になった。」[8]

ここにみられるようにダイダッポは巨人であり，通常は僧侶のイメージで「ダイダラ坊」と呼ばれている。このダイダラ坊の巨人たるゆえんは山中を駆け巡る速さが人間をはるかに超え，長い手足をもった大男にちがいないというところにある。また山中に巨石を祀るその信仰形態が巨石を楽々と動かすことのできる大男を思わせるためでもある。いずれにせよダイダラ坊の語源は「タタラを操る法師」といった意味合いに求められるだろう。ダイダラ坊の伝説は製鉄伝承の一つなのである。

房総地域にはこの巨人伝説が数多く残されている。平野馨氏の調査では50カ所が確認され，未確認のものを含めればその数はさらに増える可能性もある[9]。房総のダイダッポ伝説は主として地域の開拓者として位置づけられているが，その伝説の分布は修験道勢力の分布と関連をもつと考えられる。その意味で，忌部氏ともかかわる伝説といえるだろう。すなわち，富山の天富命伝承とダイダッポ伝説とは忌部氏の存在を介して結びついているのである。

この忌部氏の足跡は房総半島にとどまることなく，東北地方へと拡大していく。天目一箇神ゆかりの「一ツ目」伝説と大同二年開山伝承をもつ寺社や鉱山の分布は忌部系の修験・製鉄集団の足跡をしるすものといえるだろう。その点で房総半島は東北開拓への足場でもあったわけである。

いずれにせよ富山は富を象徴する山である。そして忌部氏以後も修験道と深くかかわり，観音信仰の山としてあがめられてきた。ただしその痕跡は極めて限定されている。富山南峰の観音堂は修験道の遺物として重要なものであり，行基建立とのいい伝えが残されている。そうだとすると，鋸山との関連も考えられるのだが，資料不足で何ともいえない。現時点では，天富命，ダイダッポ，行基に関する伝説の担い手たちが重層的にかかわった，としかいいようがないのである。

第5節　愛宕山 —— 雨乞いと火の神 ——

今度は内陸に目を転じて，富山の東方に位置する愛宕山（408.2m）を取り上げてみよう。嶺岡山系の主峰で鴨川市と丸山町の境界に位置する愛宕山は房総半島の最高峰であり，その山頂には愛宕神社が祀られている信仰の山である。この愛宕神社（所在地は丸山町大井2535番地）は「愛宕神社由来取調書」（1906年11月）によれば，神亀元年（724年）に行基による開山といい，その後江戸時代に至って享保5年（1720年）に「雨乞い塚」が造営されている。それゆえ愛宕山は近世においては雨乞い信仰の山として里人から信仰されていたことがわかる。しかし現在では山頂直下を車道が通り，山頂一帯が航空自衛隊のレーダー基地として使用されるに至って，登山の対象からは全く

はずれてしまった。

この愛宕信仰の源流は京都市の北西に聳え丹波，山城両国の境界に位置する愛宕山（924m）にある。すなわち，古代山城に本拠をもっていた秦氏の信仰していた嵯峨山に大安寺の僧・慶俊が愛宕権現を祀ったのが愛宕信仰のはじまりといわれる[10]。愛宕山信仰の実体は定かではないが，「火の神」にかかわるものである。従ってそれは原初的には採鉱・冶金の神であり，そこにのちになって雨乞いの信仰が重なっていったものである。福田良氏によれば，愛宕信仰は愛宕大明神，のちに愛宕権現を祭神とするが，本質的には両神は同一神であり，修験者によってのみ信仰され，さらに火伏せの神や雷神を合祀して庶民の信仰として広がっていった，と述べている[11]。しかし火伏せの神や雷神はいずれも鍛冶信仰に関連しており，その背景には修験道における採鉱・冶金部門がかかわっているはずである。従って愛宕信仰の原初形態は鉱物採取にかかわるものとみてよいだろう。そしてこの点は北部九州に拠点をもち，のちに山城に移った秦一族が古代における極めて有力な採鉱民族だったということとも連関しているはずである[12]。

その一方，愛宕の神を『古事記』，『日本書紀』に登場する迦具土（軻遇突智）とみる説もある。迦具土は伊邪那岐，伊邪那美の子供であり，その出生に際して母・伊邪那美が女陰にヤケドを負って死亡したことから仇子と呼ばれ，「火の神」だというのである。だが福田良氏によると，この説は明治初頭の廃仏毀釈と修験道禁止令によって愛宕山大権現が愛宕神社へと改称され，祭神も愛宕権現から迦具土に変更したことによる付会だと指摘されている[13]。確かに修験道の弾圧により迦具土がもち出された経緯があったのである。ただし祭神を迦具土に変更しても，「火の神」という愛宕神の本質は残されているとみたい。

およそ以上のような性格をもつ愛宕信仰に由来する愛宕山は東北地方から九州にまで分布しているが，房総地域には嶺岡，岩井原，久留里，銚子のほか4座を数え，分布密度が高い。このことはこの地域で修験道を介在させながら愛宕神が里人のあいだで広く信仰されていたことを示している。里人（農民）にとって愛宕神は雨乞いの神であった。修験者は里人と身近な里山を愛宕山とし，そこに愛宕神社を祀り，柴灯護摩を焚いて祈雨する秘法「愛宕の法」を取り行なった。「愛宕の法」とは修験道にとって最高の秘法とされるが，基本的には火を焚いて雨乞いをする秘法であり，山間部の水利の悪い地域に居住する農民層に広く行きわたっていたとみることができる。その最盛期は江戸時代の中期以降であるが，明治になってからは修験道弾圧によりほとんど忘れ去られ，わずかに地名と神社にその名をとどめるばかりになってしまった。

なお，愛宕神社，愛宕地名に関して，柴田弘武氏は古代製鉄にかかわるところに祀られたのではないかとしている。すなわち常陸の場合，水戸市の那珂国造の墓と推定される古墳や石岡市の茨城国造の墓と推定される古墳がいずれも「愛宕山古墳」と呼ばれているところから，これを根拠にして愛宕地名は古代の豪族オオ氏の進出地と製鉄地にかかわっているのではないかというのである[14]。確かに房総にもオオ氏の足跡が残されてはいるが，オオ氏と愛宕地名とが直接結びつく論拠には乏しいように思われる。愛宕地名の分布は秦氏系修験者とのかかわりで考えていくべきではないかと思われる。ただし愛宕地名と製鉄とのかかわりは柴田氏の指摘のとおりだといえるだろう。嶺岡愛宕山の南面に位置する嶺岡牧場ではすでに平安時代から馬の放牧が行なわれていたといわれるが，その牧は製鉄にかかわる燃料採取のための森林伐採地帯か焼畑の跡地だった可能性が強いと思われる。この点で，愛宕，製鉄，牧との関係がさらに考慮されていくべきだろう。

第6節　高塚山 —— 雷神・風神と高橋氏 ——

次に取り上げるのは外房の高塚山（216m）である。千倉町に属す高塚山の山頂には不動尊が祀

られている。良弁（689－773年）開創伝承をもつこの不動尊は密教系修験道とのかかわりが濃厚であるが，その真の由来は定かではない。

そこで高塚山の由来に関するこれまでの研究成果を手がかりに，その由来に迫っていくことにしたい。

まず福田良氏は不動尊の本尊がすでに山麓に移され，山頂には風神・雷神の石像を祀る山門，および仮堂，敷石，礎石，井戸が残っている，と指摘している。それと併せて福田氏は房総に高塚山が他に3座（上総中野，大多喜，大原）あることを述べ，大原の高塚山に関して「大原の町外れにある真言宗の大聖寺は，浪切不動として有名である。もし，この不動様が高塚山と関係があるなら，千倉（七浦）の高塚山に，不動様が祀られているのと共通する現象であり，何らかの手掛りになるかもしれないが，単なる偶然の一致かもしれない」[15] としている。千倉の高塚山の麓には大聖院という寺があり，大原の大聖寺と共通する名称をもっている。その点で両寺院には何らかの関連性がありそうだが，詳細は不明である。ただ大原の浪切不動の由来については「鎌倉時代に，漁師の妻が海辺で不動明王を拾って，それを祀ったのが起源と伝えられている」[16] との伝承しか残っておらず，その真の由来はぼかされているとしかいいようがない。

その一方で，福田氏は上総中野（大多喜町）の筒森集落の東南の高塚山に関連して，麓の筒森神社が672 年の壬申の乱で敗れ，この地に逃げ延びて亡くなったという伝説をもつ大友皇子と十市姫を祀っていることにも言及している。大友皇子は上総国田原宮（旧望陀郡田原田）に逃げ延びたという伝説があるが，この田原田と筒森とは大福山を隔てて10kmほどの距離であり，近接している。もちろん，伝説のいうように大友皇子が逃げ延びたということは考えられないが，大友方の勢力が逃げて来たという可能性は高いように思われる。しかしそれ以上に興味深いことは，筒森という地名の「筒」が雷神につうじるという谷川健一氏の指摘を考えるとき[17]，高塚山がここでも雷神信仰と結びついてくるという点である。このことは高塚山の雷神・風神信仰がある程度の普遍性をもっていることを示唆している。この雷神・風神信仰の原初形態は製鉄とかかわる。雷神は火花を散らして鉄を叩く鍛冶の神であるし，風神は金属を融解するうえで炉を高温で加熱するための必要条件の一つとなる強風を授けてくれる神だからである。では，高塚山が製鉄とかかわった痕跡はあるのだろうか。

この点とも関連して，角川書店版『日本地名大辞典』の「千葉県」版（1985年）による次のような指摘は一つの手がかりを与えてくれる。すなわち同書によれば，『安房国神社志料』において高塚山の山頂不動堂は『延喜式』「神明帳」で小社に列せられた高家（たかべ）神社であるともいう，という説を紹介している。『安房国神社志料』は「高家ハ高冢ノ誤ニシテ，高冢神社ハ即チ本郡大川村ノ高冢山上ナル不動堂ナランカ」というのであるが，その可能性は薄いように思われる。ただし高塚山と高家神社とは何らかのつながりがあるのではないか。延長5年（927年）に完成した『延喜式』に記載があり，磐鹿六雁（いわかむつかり）命を祭神とする高家神社は中世に至って廃社となり，その所在地は不明となってしまった。現在の高家神社は江戸時代の末期に千倉町南朝夷上ノ塚に再建されたものである。この高家神社の祭神・磐鹿六雁は料理の神様とされ，毎年11月23日には包丁式が行なわれている。この高家神社の来歴について，『千倉町史』（1985年）はおよそ次のように述べている。すなわち，この地は朝廷の台所を預る「大膳職」を掌る「高橋氏」が出た土地柄であり，町内の大溝遺跡には古代の製鉄遺跡があって，この地では古来よりすぐれた刃物と料理に欠かせぬ包丁がつくられていた，というのである。料理の神・磐鹿六雁を祀る高家神社の背後には製鉄にかかわる高橋氏の存在があったわけである。

そこで今度は，磐鹿六雁と高橋氏の視点から高塚山をみておこう。

まず磐鹿六雁であるが，この神が史書に登場するのは『日本書紀』景行53年のくだりである。こ

の年の冬10月，景行は伊勢行幸ののち東海から上総の国に至った。このとき膳臣（かしわでのおみ）の遠祖の磐鹿六雁が蒲（かま）で襷（たすき）をして，白蛤（うむき）（ハマグリ）をすすめた。六雁はこの功により，膳大伴部を授けられた，とされる。景行の東国における足跡は定かではないが，『常陸国風土記』「行方郡」のくだりには，「香澄の里にかつて大足日子（景行）の天皇下総国の印波の鳥見の丘に登る」といった記載がある。また「高橋文書」によれば，景行は磐鹿六雁を従えて安房浮島宮に至り，葛飾野に行幸して狩をしたといい，この狩場が小金原だという[18]。

景行の実在性については当然のことながら疑問視されている。だが房総における景行伝説は日本武尊の伝説とともに，何らかの史実の反映とみてよいだろう。殊に「高橋文書」の内容は製鉄とのかかわりからみて興味深い。というのは「鎌ケ谷以北は平原広漠し，小金原という」とされる小金原は牧場として利用される以前は文字どおり，「小金」（粉金）の採取地帯だったと考えられるからである。小金原一帯に残る採鉱，冶金にかかわる遺跡群や，金売吉次の伝説をはじめとするいくつかの伝説がそれを裏づけている。そして景行が小金原で磐鹿六雁を従えて狩をする，という話の「狩」も砂鉄の採取を意味しているにちがいないのである[19]。従って先の叙述は景行に代表される中央勢力が鉱物資源を求めて東国に遠征し，磐鹿六雁こと高橋氏がその現地案内をしたということを示しているのだろう。そして磐鹿六雁を祖とする高橋一族は房総千倉に拠点をもち，刃物や包丁づくりに長じた製鉄集団だったのである。

このような観点からみるとき，高塚山の原初的な信仰も高橋氏とかかわるものではないかとみてとれる。すなわち高橋はもともと「高」の一族であり，南房総最高峰の高塚山に祖霊を祀り，さらに高家神社を建立したのではないだろうか（高家は現在タカベと読まれているが，もともとはタカノイエであった）。従って高塚山信仰はまず製鉄にかかわる雷神・風神信仰にあったとみるべきである。そしてそれがのちに，密教系の不動尊信仰に吸収されて房総半島における他の高塚山へと伝幡していった。それとともに，農民層への信仰の拡大によって雷神は雨乞いの神へ，また風神は風除けの神へと意味内容が様変わりしていったのである。

第7節　清澄山 —— 妙見と虚空蔵 ——

最後に，この高塚山とともに外房の代表的な名山である清澄山（天津小湊町）を取り上げることにしたい。清澄山の最高峰は妙見山（383m）と呼ばれ，日蓮ともかかわりの深い山中の名刹清澄寺の本尊は虚空蔵菩薩である。妙見は北極星，虚空蔵は金星であって，いずれも星神の信仰にかかわっている。それと同時に，これらの神々の信奉者は製鉄集団でもあり，清澄山もまた房総の他の山々と同様，製鉄に関係の深い山だということが示唆されている。

清澄山は寺伝によれば宝亀2年（771年）に不思議法師なる人物が創建し，のち承和3年（836年）に慈覚大師が中興したという。この不思議法師についてはほかにいい伝えがなく，どのような人物なのか定かではない。延宝7年（1679年）4月に慶宜の記した「清澄寺由来」という縁起では，この地に来山した一人の法師が「奇異のことすこぶる多く」，不思議法師と名づけられたとある。縁起は以下，千光山清澄寺の由来をおよそ次のように記している。

この不思議法師が山中の龍池のほとりにある柏の古樹が夜ごと光を発するのを怪しんでいると，一人の老翁が現われ，「私はあなたが来るのを一千年間待っていた。この霊材を伐って虚空蔵尊を彫れば利益は無量無辺である。私は妙見菩薩である。この山を千光山というのはこの光る樹木のゆえにである」と語った。そこで法師は虚空蔵・妙見の両尊の像を彫った。だが山渓深く，この両尊

を安置する伽藍の地が容易には見当らない。その時，神人のお告げがあり，「私の所有するこの池は涸れ池になったので，あなたに提供しよう」という。法師は大いに悦び，この池に伽藍を建てて両尊を安置し，伽藍のほとりに清泉が湧くよう念じていると，泉が湧き出て，それが「清澄」の由来となった。その後，明星天子の来山に基づき，その泉を明星水と名づけた。法師は妙見の示現を感じ，この菩薩を鎮守とした。宝珠三顆を3カ所の地中に蔵し，そこを如意山・宝珠山・摩尼山と名づけた。　〔以下，略。〕

この縁起の内容はすでに一つの「語りごと」の世界を形成しており，そのまま受け取るわけにはいかない。そこでこの縁起から本質的な点だけを抜き出すと，次のようになるだろう。

①不思議法師の来山以前に清澄山には先住者がいて，妙見信仰もその先住者に根差している，という点。

②妙見と虚空蔵の相違については特に問題とするには当たらず，双方とも星神であって，御利益を与えてくれる。

③清澄寺の山号「千光山」は星 ── 流星 ── の輝きに基づき，寺号「清澄」は地中から湧き出る泉に基づいている。この星と泉は天から授けられる鉱山（隕石）と地中から授けられる鉱石を暗示している。

はっきりいえば，清澄寺の宝亀2年という成立年代は信用することができない。ただ清澄寺という仏教寺院の成立以前に，妙見・虚空蔵という星神を信仰する製鉄集団がいた，と語られているように思われるのである。

妙見信仰についてはすでに述べたように百済聖明王の第三子淋聖太子の渡来と関係しており，その系譜はタタラ姓を名乗る中世豪族大内氏に引き継がれていく。清澄山信仰がその系譜とどのように関連するのかは定かではないが，全国的にみても妙見，虚空蔵が製鉄とかかわることはほぼ間違いのないところである。この点に関して，産婦人科医であるとともに「鉄の民俗学」の研究者でもある若尾五雄氏は日本全国の主要な妙見山（妙見尊）・虚空蔵山（虚空蔵尊）と鉱山とのかかわりを次のように示している〔表1〕。

〔表1〕　妙見・虚空蔵と鉱山

妙見名	所在地	鉱山
妙見社	熊本県八代市	中宮に銅山跡。
妙見城	福岡県八女郡旧星野村	金坑あり。
妙見山	広島県福山市	銅鉱。
妙見山	岡山県英田郡	銅鉱。水銀鉱跡。
妙見山	兵庫県養父郡	金鉱跡。
星田妙見社	大阪府旧北河内郡	金山地名ほか。
妙見山	和歌山県海草郡丹明寺	銅鉱跡。
内津妙見寺	愛知県春日井市内津	マンガン，鉄。
妙見寺	長野県小県郡武石村	金山。
鳥海妙見堂	岩手県磐井郡興田村	砂鉄，砂金。
日高妙見堂	岩手県水沢市	不明。ただし付近は砂鉄採取地。

虚空蔵名	所　在　地	鉱　山
虚空蔵山	佐賀県藤津郡喜野	波佐見鉱山あり。
虚空蔵尊	鹿児島県串木野市冠嶽	芹ケ野鉱山あり。
虚空蔵尊	徳島県阿南市大竜寺山	水銀坑。
虚空蔵尊	高知県室戸市最御崎寺	金鉱。
虚空蔵尊	岐阜県大垣市赤坂明星輪寺	金，銀，銅，水銀。
虚空蔵山	新潟県北蒲原郡安田町	鉄鉱。
虚空蔵尊	福島県河沼郡柳津村円蔵寺	銅山。
虚空蔵山	宮城県伊具郡丸森町大張	金山部落あり。
虚空蔵山	山形県米沢市	吉野鉱山。
虚空蔵尊	岩手県気仙郡唐丹・五葉山	金山。
虚空蔵尊	青森県百沢村・岩木山	鉄鉱。

（出所）若尾五雄『金属・鬼・人柱その他』堺屋図書，1985年，より抜粋して整理。

残念ながら若尾氏は安房清澄山の来歴には言及していないが，清澄山の妙見もその例外ではないだろう。

清澄寺に関してはもう一点，慈覚大師が来山して虚空蔵求聞持法を修めたとされている。虚空蔵求聞持法とは通常，一種の「記憶術」と考えられている。すなわちそれは俗世間とのかかわりを一切断ち，山中で虚空蔵菩薩を讃える真言を唱えつづける秘法であり，これによって超人的な記憶力が得られる，とされる。『三教指帰』によれば空海もまた，18歳の時に一人の沙門より虚空蔵求聞持の教えを受け，これが切掛けとなって大学を中退している。だがこの虚空蔵求聞持法は虚空蔵信仰とのかかわりから，製鉄との関連が示唆されるのである。つまり「鍛冶と結びつく虚空蔵信仰をもっと徹底させたのが虚空蔵求聞持法」[20] といえるのではないかということである。佐藤任氏の研究によれば，虚空蔵求聞持法の内実は「雑部密教の原初科学」であり，哲学的，神秘的，医術的，天文学的内容をもった錬金術（密教）へとつらなるものである[21]。従って慈覚大師の清澄来山伝承も一つの製鉄伝承として理解されなければならないだろう。

最後に，このような内実をもつ清澄山信仰に物質的な根拠はあるのか，という問題が残るだろう。福田良氏はこの点に関して，清澄妙見山について「清澄山主峰で，南麓一帯から鴨川市にかけて，古代製鉄遺跡や，製鉄に関する地名が多い。ここでは金ではなく，鉄である」[22] と述べている。福田氏はそれ以上述べてはいないが，実際のところ清澄山周辺には「大風沢金吹台」遺跡（天津小湊町内浦，年代不明）や「男金金尿山」遺跡（鴨川市和泉，近世）といった製鉄遺跡が残されている。また鴨川市内には製鉄関連地名が数多くある。『日本地名大辞典』「千葉県版」によって，小字名を拾ってみると次のようになる（左は字名）。

和　　泉 ── 男金，上金井戸，下金
打　　墨 ── 鍛冶屋坂
坂　　東 ── 鍛冶畑
池　　田 ── 花金田（はなかねだ）
京　　田 ── 花金田（かきんでん）
太田学 ── 金山
奈良林 ── 小金

北小町 ── 金堀
北小原 ── 金堀
北風原（ならいはら） ── 金堀
仲 ── 金井坂
宮山 ── 鍛冶屋敷
細野 ── 金堀，小金院
西江見 ── 鍛冶屋，金銅
内遠野 ── 蟹田〔注：蟹は鍛冶の転訛〕
岡波太 ── 蟹田
浜波太（はまなぶと） ── 礪屋（とぎ）敷，長者屋敷
西 ── 吹原〔注：吹は鉄（かね）を吹く，につうじる〕
上 ── 秀金
東真門 ── 金銅

これで先の福田氏の指摘に十分な根拠が得られたことになる。またそれと同時に，清澄山における妙見，虚空蔵信仰の根源が製鉄がらみだったということの証しともなるだろう。清澄山もまた房総の他の山々と同様に，密教系製鉄集団の山だったのである。

第8節　結　語

以上，房総の代表的な山岳およびそこに鎮座する寺社の来歴を検討してみた。その結果，房総地域における山岳宗教の存立基盤は鉄をはじめとする鉱物資源の採取およびそこから派生する秘儀的な性格をもつ独自の信仰にあった，とみることができる。ただしその担い手たちはこの地に固有の集団というよりは，ほとんどが西方からの移住者たちであった。ここで取り上げた6座に関していえば，古代における最強にして最大の製鉄集団である秦氏の末裔，行基の名を語る密教系修験集団，さらにタタラとかかわりをもち妙見，虚空蔵といった星神を信仰する製鉄集団などがその移住者であった。唯一不明なのは高塚山とかかわる高橋氏の存在であるが，その高度な製鉄技術を考えるとき，彼らもまた西方からの移住者と思われるのである。

このように古代のある時期に多様な製鉄集団が房総の地に移住してきた。それは房総の地に彼らの欲求を充足させるだけの豊富な鉱物資源があったからにちがいない。この豊富な資源を物質的基盤にしながら房総の開拓はすすめられ，地域文化が展開していったとみて差支えないだろう。そしてその伝統は近世に至るまで受け継がれ，房総地域は修験道のメッカとしての位置を占めるまでに発展したのである。

だが明治以後，このような伝統は衰退し，第二次世界大戦後はその衰退が加速化していく。民衆と山とのかかわりはますます薄れ，固有の山岳文化も忘れ去られている。このような状況のなかで，地域固有の文化を見直すためにも，森林を頂点とする自然生態系の復興をすすめ，山岳宗教のもつ意味を改めて考えていく必要があるのではないだろうか。

本稿の試みは地域文化を見直すための一つの視点を切り開いていこうとするところにあった。それは端緒的な議論にとどまったが，これを手がかりにして，今後とも個別の地域に焦点を当てて，地域文化をさらに掘り下げて検討していくことにしたい。

＜注＞

(1) 以下の論点に関しては，拙稿「下関地域の基層文化」，『下関市立大学産業文化研究所所報』2号，1992年，19－20頁，に基づいている。
(2) 柴田弘武『風と火の古代史』彩流社，1992年，123－142頁。
(3) この点はすでに拙稿「西津軽地域の民俗調査」，『法政大学大学院紀要』24号，1990年，128頁，で論じたことがある。
(4) 筆者はすでに長門国の鬼ケ城にまつわる鬼伝説について，このような観点から解釈している。拙稿「長門国鬼ケ城伝説の研究」，『地域文化研究』8号，1993年，を参照。
(5) 福田良『房総山名考〔同名の山編〕』崙書房，1991年，91頁。
(6) 以下の日本寺にかかわる記述は主として，『鋸南町史』1969年，459頁以下，による。
(7) 谷有二『日本山岳伝承の謎』未来社，1983年，166－167頁。
(8) 高橋在久・荒川法勝『房総の伝説』角川書店，1976年，87頁。
(9) 平野馨『伝承を考える』Ⅱ，うらべ書房，1986年，35－49頁。
(10) 大和岩雄『日本にあった朝鮮王国』白水社，1993年，205頁。
(11) 福田良『房総山名考』150頁。
(12) 秦氏と採鉱とのかかわりについては，拙稿「古代採鉱民族の構成」，『下関市立大学論集』36巻1・2号，1992年，を参照。
(13) 福田良『房総山名考』146頁。
(14) 柴田弘武『東国の古代』崙書房，1980年，140－142頁。
(15) 福田良『房総山名考』140頁以下。
(16) 『新版　千葉県の歴史散歩』山川出版，1989年，196頁。
(17) 谷川健一「地名はよみがえる」(3)，『読売新聞』（夕刊）1989年11月30日付。
(18) 「高橋文書」については，藤沢衛彦『日本傳説叢書　下総の巻』1919年，114－115頁，による。
(19) 景行と小金原の伝説は高野山開山伝承の一つ，「弘法大師が犬を連れて狩に出る」話と共通項をもつように思われる。拙稿「マタギ成立史研究ノート」，『法政大学大学院紀要』23号，1989年，196－197頁，を参照。
(20) 大和岩雄『日本にあった朝鮮王国』209頁。
(21) 佐藤任『密教と錬金術』勁草書房，1983年，44，92，140，150頁。
(22) 福田良『房総山名考』225頁。

＜文　献＞

天津小湊町史編さん委員会，1990，『天津小湊町史』（史料集1）。
千葉県文化財保護協会，1986，『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』。
千葉県山岳連盟，1977，『房総の山』（第2版）千秋社。
千倉町史編さん委員会，1985，『千倉町史』。
福田　良，1991，『房総山名考〔同名の山編〕』崙書房。
府馬　清，1984，『鹿野山とその周辺』うらべ書房。
平野　馨，1961，『房総のやまとたける』房総民俗会。
平野　馨，1986，『伝承を考える』Ⅱ，うらべ書房。

井口一幸，1985，『古代山人の興亡』彩流社。
神代康隆ほか，1992，『密教の本』学研。
鋸南町史編纂委員会，1969，『鋸南町史』。
丸山町史編さん委員会，1989，『丸山町史』（史料集）。
岡野捷郎，1979，『鹿野山と山岳信仰』崙書房。
佐藤　任，1983，『密教と錬金術』勁草書房。
柴田弘武，1992，『風と火の古代史』彩流社。
高橋在久・荒川法勝，1976，『房総の伝説』角川書店。
谷　有二，1983，『日本山岳伝承の謎』未来社。
若尾五雄，1985，『金属・鬼・人柱その他』堺屋図書。